

大学院で日本仏教を専攻に決めた時、こんなに大変なこととは思わなかった。当時、東京大学の印度哲学科に日本仏教の講座が新設されたばかりで、着任された田村芳朗先生の新鮮な講義に目を見開かされる思いがしていた。身につかない横文字を振り回すのでなく、足下の思想や文化を踏みしめて立ちたかった。だが、残念なことに志を同じくする者はなく、十年間の田村先生の在任中、この方面に進んだ者は私一人であった。

日本仏教というと、研究も進み、研究者の数も多いかのように思われがちである。しかし、その大部分は歴史学の分野のものか、さもないれば宗派の立場に立った宗学的研究であり、宗派性を離れた教理史・思想史の研究は極めて微々たるものである。本格的な通史としては、昭和八年に刊行された先駆者・島地大等師の不完全な講義録『日本仏教教学史』が今日にいたるまで唯一のものである。今日、この方面の中堅・若手の研究者の数

印度哲学科の中の日本仏教

末末文美士

は五指にも満たないであろう。研究室の中でも窓際的な存在であった。「梵語のできない者が中国仏教をし、漢文も読めない者が日本仏教をする」とか、「梵語さえ学べば、中国や日本の仏教は勉強しなくてもわかる」などと公然と言われていた頃である。「なぜ印度哲学科で日本仏教を勉強できるのか」と外国の研究者に尋ねられて、返事に窮したこともあった。くやしいと思うことばかり多かった。そんな中で模索していた時、幸いに福永光司先生とその門下の優秀な先輩や友人たちから漢文資料の本格的な扱い方について手ほどきを受けることができて、しばらく漢訳仏典や中国仏教の研究に深入りすることになった。日本仏教の研究では味わえなかった共同研究の楽しさを知ることができた。

思えば、こんなに地味な分野に若い人材を求める方が無理なのかもしれない。それならばせめて馬力をかけて、私一代でできるだけの仕事をまとめておかねばなるまい。

(すえき ふみひこ・東京大学助教授―仏教学―)